

## 会員の出した本

松村平則・青木辰司編 『有機農業運動の地域的展開』

(家の光協会、一九九一年、二五〇〇円)

有機農業を行なうことが、現代日本では「運動」である。このことは著者たちの主張というよりはそれを実践している農民たち自身の考えである。そこに有機農業の現状が如実に示されている。本書が貴重なのは、いままでの多くの有機農業研究と異なり、消費者（都市民）の立場からではなく、生産者（農民）の立場から描かれていることである。有機農業を担う個々の農家の経営や考え方も丹念に描かれており、学ぶことが多い。

満田久義・寺田良一・三浦耕吉郎・安立清史訳

ハンフリー・バトル共著 『環境・エネルギー・社会』

(ミネルヴァ書房、一九九一年、三六〇〇円)

会員の満田久義氏ら四人の共訳である。本書はアメリカにおける環境社会学のテキストであるが、内容が高度であり、専門家にも重宝である。アメリカの環境社会学は農村社会学者がつよく関わってきた歴史をもっており、その意味からも本会の会員にとつて興味をもてるだろう。こなれた良い訳である。

米沢和彦 『ドイツ社会学史研究』

(恒星社厚生閣、一九九一年、四三〇〇円)

米沢氏は農村社会学者であるだけでなく、ドイツ社会学の研究

者であることでも知られている。本書は直接には農村研究とは関係がないが、補論に「マックス・ヴェーバーにおける農村分析の基礎視角」という小稿がある。本書はドイツの社会学会の歴史を第一次資料を用いながら分析しており、例のヴェーバーの「価値自由」について、当時の学会での論争がおもしろい。もちろんヴェーバー自身が答弁している。

(鳥)